

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2012

課題番号：23700759

研究課題名（和文）日英ラグビー国際試合のメディア言説に関する比較研究

研究課題名（英文）Comparative study of Japanese and English media discourses concerning international rugby matches between the nations.

研究代表者

森 仁志（MORI SATOSHI）

関西大学・人間健康学部・准教授

研究者番号：20458988

研究成果の概要（和文）：現代社会では、スポーツのナショナル・チームが国際試合で繰り広げるパフォーマンスやプレースタイルは、国民を表象する記号として機能する。本研究の目的は、ラグビーを事例として、代表選手の身体を通じて「日本らしさ」が語られ意味づけられるプロセスを提示・分析することにある。具体的には、日本と英国の国際試合をめぐる言説を両国のメディアから収集することによって、ラグビー「母国」と「後進国」のヘゲモニックな関係性のなかで、記号としての「ジャパン」（日本代表）＝国民の表象が、いかに生成・流通・消費されてきたのかを明らかにする。

研究成果の概要（英文）：In modern society, a national team's style of play in international games symbolizes the nation itself. This study presents and analyses the process by which the meaning of "Japaneseness" have been constructed through the actions of national rugby players. In particular, by gathering both Japanese and English media discourses concerning international matches between the nations, this study show how representation of Japan have been generated, distributed, and consumed within the hegemonic relationship between the "mother" nation of rugby, England, and the "underdeveloped" country, Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 スポーツ科学

キーワード：スポーツ文化人類学、ナショナリズム、メディア言説、ラグビー

1. 研究開始当初の背景

申請者は、2008、2009年度の科研費（「ナショナリズムと身体の政治学—ハワイ日系人のベースボールを事例として」）の助成等を得て、特定の身体／技法を媒体としたナショナリズムの生成プロセスに関する研究を継続的に行ってきた。具体的には、プロ野球界で活躍したハワイ日系二世選手の経験に注目することにより、日米のメディアや観衆のまなざしに晒されながらパフォーマンスに構築される彼らのアイデンティティの動態について考察を試みてきた。この成果の

一部は、「越境する身体／技法—ウォーリー・与那嶺のミメシスする身体へのまなざし」（日本スポーツ人類学会）などですでに発表している。調査の結果、明らかになった点を整理すると以下ようになる。

(a) 非西洋のプレーヤーが西洋の力と遭遇するときの身体経験は、個人的なものであると同時に、メディアの集合的な言説によってつねにすでに文脈化されている。

(b) 「日本らしい」プレースタイルや身体をめぐる言説は、国内メディアにおいて自律的に

生成するわけではなく、欧米からの序列化のまなごしを受け、不均衡な権力関係を背景に相互補完的に紡ぎだされる。

以上の結果を踏まえ、これまでの研究を発展的に継承する形で、(プレーヤー個人の身体経験を文脈化する)メディア言説に重点をおいた研究を進めてきた。事例としては、身体的な接触の多さから身体/技法をめぐる語りが先鋭な形で立ち現れるラグビーに注目し、日本代表のプレースタイルに関する言説の収集を継続的に行っている。

2. 研究の目的

日英のメディアによる「日本らしさ」の構築のプロセスを分析する。とりわけ、両国間のメディア言説の不均衡な引用関係を明らかにすることで、国家間でどのようなメディア媒体が盛んに引用され、その言説が他国の国内の語りの多様性を序列化する際にいかなる権力をもつのかといった点に着目する。また、時系列に整理した資料から、言説の歴史の変容にも注目し、国内外のメディアの重層的な権力関係のなかで、代表チームのプレースタイルを通じて「日本らしさ」=国民の表象が生成・流通・消費されていくプロセスを提示する。

3. 研究の方法

日本および英国ロンドンを調査地として、日本代表チームがラグビー「母国」イングランドに初挑戦した1971年の試合(花園ラグビー場と秩父宮ラグビー場の二試合)を起点に、70年代に行われた日英国際試合に特に焦点を当て、両国の新聞雑誌記事・映像メディア資料などを中心に収集を行った。英国ロンドンでは主に大英図書館、トゥイックナム世界ラグビー博物館などで調査を実施するとともに、日本国内でもラグビー協会や大学図書館を中心に関連資料を収集した。

4. 研究成果

本研究で入手した資料のうち、日本代表戦を詳細に報じた英国三紙のガーディアン、タイムズ、デイリーテレグラフの記事をとりあげ、特に1970年代のイングランド戦を中心に、「日本らしさ」をめぐる言説を抜粋する。これは、日英のメディアによる「日本らしさ」の構築プロセスを包括的に分析するための基礎的な作業の一つに位置づけられる。

(1) 1971年

この年、イングランド代表の初来日で日本代表の長年の念願であった対戦がはじめて実現。花園と秩父宮で二回の対戦を行い、日本代表はそれぞれ19対27と3対6で戦前の予想を裏切る接戦を演じた。

・ガーディアン (オブザーバー)

同紙の随行者 David Irvine は、イングランド代表による日本遠征を Missionary venture として位置づけ、正式な国際試合としてよりはトライアルになるだろうと当初予想していた。しかし、第一戦でイングランドが予想外の苦戦をすると、「暑さだけがイングランドの赤い顔(赤面)の理由ではない」との見出しで、同代表の戦術を痛烈に批判。特にキャプテンとフォワードリーダーの試合理解が不十分で、最初の20分でフォワードで圧倒できなかったことが大苦戦の原因になったと指摘。Irvineによれば、日本は効果的なタックルを決め、相手のバックローの動きを封じ込め、「群がり、混乱させる」ことで優位に試合を進めたが、後半残り20分からはイングランドとの経験の差が顕著となったという。

第二戦の当日朝の記事で Irvine は、日本代表の将来性に関して、イングランド代表のプレーを日本の選手たちが上手くコピーすること、現地では常に多くの日本人の観客に囲まれて練習していること、イングランドからの随行者がルールを教授している点などを例にあげ、「日本人のコピーし、他人のアイデアを取り入れる能力は、彼らに生まれつき備わったスピードと器用さと合わさることで成功の基礎」となると評価。ただし、日本の克服すべき課題として、フォワードの体格不足と、グラウンドの不足の二点を指摘している。

そして第二戦で再びイングランドが苦戦すると、日本側のオフサイドルールに対する知識の欠如を指摘しつつも、「すべての興奮と閃きは—実際にそれはイングランドのスタイルを連想させるものだが—日本によってもたらされた」と評価。一方で、「イングランドのランナーとハンドラー」としての資質を否定する保守的な試合運びを批判した。

・デイリーテレグラフ (サンデーテレグラフ)

John Reason は、第一戦で善戦した日本代表チームを「不屈の日本人」、「完璧に組織化されたジャパン」と称賛。イングランドは、「日本の素早くてしこいタックルのためにセットプレーから前進することができなかった」という。Reasonはその例として、パワフルランナーとして知られる Jeremy Janion がシザースパスから突破しようとして仰向けに倒されたことをとりあげ、「イングランドの(国内の)チームでも、同じような状況で彼を止めることはまずできないだろう。イングランドは勝利して、喜び以上のものを感じている」として、日本のディフェンスを手放して褒め称えている。アタックに関して、「実際、ジャパンはうまくプレー

した。彼らは、イングランドよりボールを勝ち取る機会は少なかったが、試合でベストの二つのトライをした。彼らがオープン攻撃したときは、フランスを思い出させるようなスピードとしなやかさで、互いにバックアップした」。日本代表の弱点としては、「フォワードの後方へのハイキック」の処理があげられるが、イングランドはそこを攻めず、「楽観的」な試合運びをして、「すべての動きがつぶされた」。また、日本のテクニックとして、スクラムからの素早い球出しと、スクラムハーフからウイングまでのパスの速さをその特徴としてあげている。

第二戦に関して、Reason は「ペナルティで勝負が決まった」との小見出しで、「イングランドは、大阪での一戦の後ボックスキックを多用することで敵を崩すことができると考えたが、不運にもそうならなかった」。しかし、「日本は過剰な興奮」によってペナルティを繰り返し、それが敗戦につながったとしている。アタックでは「日本人は長い距離を走るとそれほど速くないが、至近距離では彼らの敏捷性と爆発的な加速がイングランドのディフェンスを危機に陥れた。日本は小さなラグビーをやりきった」としている。

・タイムズ (サンデータイムズ)

同紙の特別特派員 (special correspondent) は、第一戦に関して、「まさかの敗戦を何とか逃れたイングランドチームは、花園ですばらしい知略と勇気を目の当たりした」と報じている。特別特派員によれば、「日本はボールへのスピードと強靱なタックルでイングランドを驚かせた」という。ただ、そのプレーのコツは「ニュージーランドから学んだもの」で、また日本のシャローディフェンス (素早く相手との間合いを詰める防御法) に関しては、「繰り返しセットスクラムのオフサイドラインをこっそりと越えて前進してきた」として、日本人レフリーのオフサイドの解釈を批判している。また、コーチの Don Ruthford のコメントとして、「日本の機動性と、敵の戦略を習得する能力を警戒」と報じている。

サンデータイムズの Vivian Jenkins は、「in the land of the mighty midgets (並外れた小人の土地で) と題された記事で、イングランドの僅差での勝利は「喜びよりも安堵をもたらすものであった。そして、試合を戦った小さな日本人は最後に名誉を得た」と論評。「右ウイングの水谷という名の小さな (shrimp) 男のトライは、ライオンズがニュージーランド相手におこなった動きと同じぐらいすばらしいものであった」。また、スクラムに関しては、「あらゆる基準に照らして素晴らしいもので、日本人がラグビーのレッスンをよく学んでいることがわかる。彼らは

踊り子のように動き回り、セットスクラムで山のようなイングランド人相手にもちこたえる様子は、彼らのテクニックの素晴らしさを表している。小さな体にもものすごい力があることの証明でもある」としている。

第二戦、イングランドが再び苦戦したことを受けて、同紙の特別特派員は日本がフィジー、アルゼンチンと並ぶラグビーの「新興国」になったとしている。とりわけ、相手ディフェンスの裏をかく「トリック」、飛ばしパスや自陣深くからのカウンターアタックを称賛するとともに、スクラムやラインアウトにも一定の評価を与えている。一方で、イングランドが「ジャパンがハイキックに弱いことを証明しようと固執した」として、第一戦同様に戦術のまずさを批判している。

(2) 1973 年

1973 年に日本代表チームは初の英仏遠征を実現し、ウェールズ、イングランド、フランスを転戦した。三カ国 (ネーション) との代表戦では、ウェールズ (14-62)、フランス (18-30) は共にベストメンバー (怪我人などは除く) を送り出したが、イングランドのみは 23 歳以下代表 (10-19) で日本代表に対応した。

・ガーディアン (オブザーバー)

Geoffrey Nicholson と David Frost の記事からは、イングランドは日本戦を若手選手のトライアルマッチとして位置付けていた事実を読み取ることができる。

Nicholson は、日本代表はイングランド 23 歳以下代表に敗戦したことで、フルインターナショナルのレベルでは戦えないことを実感したはずだと指摘。日本代表をフルインターナショナルのレベルから遠ざけている要因は、「身長」であり、「不運だが、いくつかの世代の自然淘汰を待たなければいけないだろう」、「その間は、素早さや勇気で不十分ながらも間に合わせて、肉体的な接触を最小限に抑えるプレースタイルを発展させなければならない」としている。

・デイリーテレグラフ (サンデーテレグラフ)

Michael Melford は、「イングランドが追いつく日本を辛うじて払いのけた」と題した記事で、「昨日、日本の名誉は守られただろう」として、とりわけ「ショートラインアウトでインチの不足を克服した」点や、植山のトライなどを高く評価。一方で、イングランドに関しては「寄せ集めのチームの問題を解決できずに、(日本に) 追いかけて回されて、最後には疲れ果てた様子だった」と批判的な論評をしている。また会場の反応として、試合開始からキックを多用したイングランドの戦術に観客から「いつもの用心深い偵察

など必要ないかのように」ブーイングがあったことを紹介している。

John Reasonは日本代表のプレーに関して、特にFB植山のライン参加の技術の高さを詳細に解説している。ただ、「不運にも、モールでの力不足が日本代表にとってハンディキャップ」になったこと、またバックローの動きの悪さも敗戦の原因となったと指摘。MelfordとReasonは共に、試合内容全般に関しては「ちぐはぐな試合」「失望させられるゲーム」だったとそれぞれ失望感をあらわにしている。

後日Reasonは日本戦の総括として、「23歳以下代表の教訓は、イングランドBチームの必要性を示している」と主張。特に、今回23歳以下代表に選ばれたフォワードの選手が所属クラブでさえ目立った活躍ができていない点をあげ、年齢で区切るのではなく、準代表クラスの選手を評価できるB代表の国際試合を組織すべきだと持論を展開している。

・タイムズ (サンデータイムズ)

Peter Westは、ホームチームがキックを多用する戦術に観客からブーイングがあったことなどを紹介しつつ、イングランドの選手の出来の悪さを批判。一方で、日本の植山のトライを「この日のベストトライ」として称賛している。

また後日Westは、「日本は小ささから何かを生み出そうとしている」と題した記事で、日本の特徴に関して詳細に言及。まず、「何人かの本当に大きな男たちを育てるまで、世界のレベルに本気で挑戦することは難しい」として、フォワードだけでなくセンターにも体格に恵まれた選手が必要なことを指摘している。ただ、体格差による限界をこれほどうまく乗り越えたチームは今までなかったとして、そのフィットネスと勇気に高い評価を与えている。またフィールド内と外での行動規範も申し分ないと付け加えている。とりわけ「小ささから何かを生み出す」例として、ラインアウトとスクラムでの工夫をあげ、具体的に、ラインアウトのバリエーションとスローイングの正確さ、スクラムの低さとバインディングのコンパクトさを称賛している。一方で、体格差から生じる弱点として、ラックとモール、スクラム周辺の弱さを指摘。日本代表はその克服のためにボールを動かして揺さぶりをかけているが、プレッシャーがかかった状況でのパス、ハンドリングが悪く、小さなスリークォーターバックは容易にボールを奪われてしまう。また、ディフェンスでは、ラインを一気にあげるためにもろさがあり、タックルも高すぎるケースがみられ、シザーズプレーにも対応できていなかったという。

(3) 1976年

1975年にウエールズ代表が初来日(第一戦12-56、第二戦6-82でウエールズの勝利)をした翌年、日本代表は英伊遠征を敢行。今回は英国内の三カ国(ネーション)がすべて正代表ではなく、スコットランドXV(9-34)、ウエールズクラブ連合(9-63)、イングランド23歳以下代表(15-58)で日本代表に対応した。

・ガーディアン (オブザーバー)

David Frostの記事によれば、日本代表団長の金野は、今回の遠征に関して「大きな男にも弱点はある」として、「小さな男の素早さと敏捷性、そして下のボールへの利点」を生かして戦うとコメントしている。ただし、体重差によるフォワードの劣勢も認め、「日本人は人種として大きくなってきているのは事実だが、あなたたち(英国人)も同じように大きくなっているのだから、追いつくことができないように思える。唯一の方法としては、異人種間結婚を増やすしかないだろう」と彼なりの「ユーモア」を交えつつインタビューに受け答えしたという。

Christopher Wordsworthは、イングランドの大勝を受けて、この対戦を「いつものごとく、イングランドよりも日本の将来に深く関連する」ものとして、イングランドにとって日本戦がほとんど無意味なことを暗に示唆している。日本は、ケンブリッジのように体格的に同等の相手には善戦するが、ウエールズクラブ連合のように体格で大きく劣る場合は「蝶のように踏みつぶされてしまう」。

・デイリーテレグラフ (サンデーテレグラフ)

John Masonは、金野団長の戦前の談話として、日本代表が前回遠征以上の成績を残すことは難しく、とりわけ、フォワードの身長と体重の劣勢の問題を解消できていないとの見方を紹介している。

John Carpenterは、対戦結果に関して、「スペクタクルとしてはひどいもので、試合としては意味がなかった。スコアを追うのに日本製のポケット計算機が必要なほどだった」と酷評。(あまりの実力差のため)イングランド若手選手の能力を正確に把握することができなかったとしている。ただし、日本から学ぶべき点として、ヒールアウトのテクニック、そして基礎の確かさをあげている。また、大差にもかかわらずあふれるスピリットで戦ったことは称賛に値し、一、二歩でのパスのやり取りはイングランドの選手たちが捨て去ってしまった技術であるとしている。観客は日本がボールを持ったときに歓声をあげて応援したが、実際には日本代表はほとんどボールを保持することさえできなかったという。こうした事実を踏まえて、「単純なこと

だが、日本は何人かの大きな肉体をもつ男たちが必要だ」と結論づけている。

Mason はこの一戦について、日本は「生来の弱点に無慈悲に付け込まれた」として、具体的にはタックルとモールの弱さを指摘している。スクラムとラインアウトは評価に値するが、オープンフィールドでのアタックには太刀打ちできず、イングランドの選手が、三つ、四つのタックルをまたいでいく様は、「まるで間違っただけでミニラグビーのゲームに迷い込んだようだった」。大差のついた試合で、「イングランドの選手たちは、より厳しい試合では夢にも思わないようなプレーを行った。タックルに乗り、どこからでも攻め、ディフェンスをはじいてもう 10 ヤード先に進もうとする誘惑は理解できる。だがウェールズがそんな自由を許してくれることはあり得ない」。

・タイムズ (サンデータイムズ)

Peter West は、今回の日本代表の英国遠征に関する金野団長の戦前の予想を掲載。フォワードの苦戦、スピードと敏捷性を生かした戦術、バックスへの期待などがコメントされている。

タイムズ紙 (無署名) はイングランド 23 歳以下代表が大勝したことを受けて、「土曜日のトゥッケナムでの結果は、イングランドのラグビーに関する限り、ほとんどか、あるいはまったく意味をなさない」と断定。「23 歳以下の選手たちは、タックルを次々と蹴散らして突破したが、(省略) 参考にはならない。このようなことは、より高いレベルでは起きえないからだ」。この圧勝で「イングランドの復活が間近に迫っていると解釈しようとするものは、目隠しを外すか、さもなければ、近くのウェールズ人にでも意見を聞いたほうがよい」。「日本は再び、より重く、力強い敵に打倒された。(省略) 一人を倒すのに日本は二、三人を要し、そうなれば彼らのディフェンスは半開きとなった」。「日本代表は押し込められながらも、まだ何とか魅力的なラグビーをプレーした。(省略) しかし体重と身長不足により、彼らは破壊された」。

(4) 1979 年

イングランド代表は、日本・フィジー・トンガで計七試合を行う遠征で、日本代表と二回対戦 (第一戦 19 対 21、第二戦 18 対 38) した。Mike Davis を新コーチに任命し、次の代表を狙うノンキャップの 10 選手を加えた新生イングランドは、この遠征を「フレッシュスタート」を切るための重要な機会として位置づけていた。

・ガーディアン (オブザーバー)

随行者 David Frost は同遠征の戦前予想

記事で、日本代表について「クレバーな選手たちで、イングランドは彼らのトリックから多くのことを学ぶことができるかもしれない。しかし、身長差によってイングランドは問題なく日本での試合に勝利するだろう」としている。

この予想に反して、花園で行われた第一戦はインジャリータイムにイングランドが辛うじて逆転勝利を収める大接戦となった。Frost は戦評で、「イングランドの出来は良くなかった」として、日本代表のスピードと比較してイングランドのフォワードは「スローで不器用」で、バックスのハンドリングも悪かったとしている。彼の分析によれば、イングランドはオープンな展開ラグビーを試みたが、試合の途中でタイトな試合運びに急遽変更し、その後日本のフォワードが疲れでペナルティを多発するようになってようやく勝利を手にすることができた。ラインアウトは身長差からマイボールを確保することができたが、タックルの素早さに苦しめられ、日本の身長低さはイングランドのフロントローが低い姿勢で組んで押し込むのを妨げたという。また、日本のバックスが相手にまっすぐあたりにいくのではなく、ギャップを狙って走りこみ、クレバーなフットワークをみせたために、イングランドのタックルにほころびが生じた。こうしたアタックはイングランドのクラブラグビー界の最近の潮流とは異なるもので、その不慣れさが苦戦の要因になったという。Frost はこの試合に関する最も「適切なコメント」として「日本のダニー・クレーブンである金野」の発言を引用。「私はこの試合に勝たなくてよかったと思っている。イングランドの出来が悪い時に勝つのではなく、出来が良いときにこそ倒したいからだ」。

Frost は第二戦の戦前予想として、日本代表が一戦目の不運な敗戦に続いて二試合連続で善戦するのは難しいだろうとして、「イングランドは心理的に有利なポジションにある」としている。「理論通りであれば、イングランドは余裕をもって勝利することができるだろう。しかし、西洋の心理学的な理論が、不可解な日本人に適用できるかどうかはわからない」。

第二戦、国立競技場でのイングランド戦の二日後、Frost は金野のコメントを掲載している。近年、ウェールズ、スコットランド、イングランド戦での大敗で士気がさがっていたが、第一戦と第二戦の残り 10 分で、日本人はヨーロッパの主要国とも本気で戦えることを示すことができた。「あと 50 年は身長と体重で対抗することはできないが、激しい、低いタックル、ルースボールへの素早い働きかけ、チャンスでの迅速なランニングとパスがあれば、善戦することができると確認

した」。イングランドのマネジャーBudge Rogers のコメントとしては、「イングランドは、日本のバックスの敏捷性、素早さ、工夫から多くのことを学んだ」、「バックスのプレーの多くは、イングランドを上回っていた」。Frost によれば、「日本のプレーで最も魅力的だったのは、ラインアウトである。彼らの小柄さが、斬新なテクニックの発明をもたらしていた」という。

・デイリーテレグラフ (サンデーテレグラフ)

同紙の随行者 John Reason は、第一戦はイングランドにとって「不名誉な敗戦」を何とかインジャータイムに回避した「無様で幸運な勝利だった」としている。彼によれば、イングランドのフォワードは十分に戦ったが、バックスのハンドリング、ランニングコース、キックのすべてでミスが目立つ試合であった。これを根拠づけるかのように金野のコメントを引用している。「私はこの試合に勝たなくてよかったと思っている。イングランドの出来が悪い時に勝つのではなく、出来が良いときにこそ倒したいからだ」。

第二戦に関して「イングランドは曲芸に対する準備はできている」との戦前予想記事を書いた Reason は、この試合の結果について「イングランドは自尊心を再び取り戻すことができた」と一定の評価を与えている。ただし、試合残り 15 分でイングランドが集中力を欠いて失点を重ねたことについては特に強く批判を展開している。

試合の二日後、Reason は「さよならパーティ」で Budge Rogers が日本のバックスを褒め称えたことを紹介。「彼らのフィットネス、タックル、形勢観望 (opportunism) は素晴らしく、正直なところ、バックスプレーの質の高さは見習いたい」。Reason によれば、日本代表のプレーの顕著な特徴はバックスで、「彼らは (ディフェンスを) 欺くまったく新しいランニング」を開発している。「それらのいくつかは反則である。デコイのランナーがボール保持者の前で動くからだ」。ただし、あまりに多くの選手がとても素早くあちこちにむかって同時に動くため、レフリーもついていけないのだという。

小結

以上の資料から分かるのは、「日本らしさ」をめぐる言説がある程度流動的に (再) 構築されてきた事実である。

1971 年の初顔合わせでは、善戦した日本代表のプレースタイルは、日本独自のものとしてよりはイングランドやフランスやニュージーランドの「コピー」として語られ、ラグビー「先進国」のプレースタイルを「学ぶ (模倣する) 能力」が特に高く評価されている。

しかしその後 1973 年から 1976 年にかけて

日本代表が大敗を繰り返すと、ラグビー「先進国」との類似性を主張する言説はほとんど語られなくなる。むしろ、これまで以上に日本人の肉体的な劣勢が繰り返し指摘され、日本のプレースタイルは (肉体的な欠点を補うために) 「独自」かつ「特殊」な発展を遂げたものとして定義・解釈され直し、「先進国」との共通性ではなく差異がことさら強調されるようになる。

そして 1979 年に日本代表が初対戦以来の接戦を演じると、今回は日本の「コピーする能力」ではなく、「(肉体的な劣勢を補う) 独自＝特殊なプレースタイル」という常套句が、善戦の要因を説明する解釈として使用され機能するようになる。

この通時的な分析からは、1971 年の初対戦ではイングランドや他の強豪国から「学ぶ」ことで後を追いかけていたはずの日本代表が、1979 年までにその後追いのルートからはず (さ) れ、「独自＝特殊」な成長を遂げた (つまり「正統」なラグビーへの同化が不可能な) 存在として再解釈されていることが分かる。

以上は、英国メディア言説の分析のための予備的なメモランダムである。むしろ、日本メディアとのヘゲモニックな関係のなかでいかに「日本らしさ」が構築されてきたのかを読み解くことが必要不可欠であり、今後 1980 年代から 1990 年代までを含めて継続的に分析作業を進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 仁志 (MORI SATOSHI)

関西大学・人間健康学部・准教授

研究者番号：20458988